

日本語の格助詞「が」を用いた情報の授受

岡安一壽

元神奈川県立高等学校

okayasu1@f2.dion.ne.jp

概要

日本語の主部をマークする格助詞「が」の中立叙述及び総記という働きを利用し、対話に用いられた文により情報を発信・蓄積する仕組みについて述べる。

1 中立叙述と総記

主部をマークする日本語の助詞には係助詞「は」もある。「 $1+1=2$ 」という数式はしばしば、この係助詞「は」を用いて「1たす1は2」と読まれる。そこで、係助詞「は」の働きは「 $=$ 」に近いと考えられそうである。もし、そうであるならば

ヨシオ君は日本人だ (1)
と

日本人はヨシオ君だ (2)

はほぼ同じ意味を持つはずである。ある場面ではそのように判断できることもあるが、日本人の全てがヨシオという名前ではないから、一般的には(1)と(2)は同じ意味を持つとはいえない。

(1)の意味は

ヨシオ君 \in {日本人である人の集合} (3)

とした方がより良いと考えられる。

次に格助詞「が」の働きを見ていく。

日本で暮らしていた人が生まれて初めてニューヨークへ行って郵便ポストを見たときに、いつも見ている郵便ポストは赤いのに今見ている「郵便ポスト青い」という気持ちを表すために

郵便ポスト が 青い (4)

と言ったとする。この場合の「が」は中立叙述の「が」と呼ばれ[1,2,3,4,5]、単に

郵便ポスト \in {青いものの集合} (5)

という意味を持つだけでなく、

いつもの郵便ポスト \notin {青いものの集合} (6)

であることも示す。

【中立叙述の「が」】

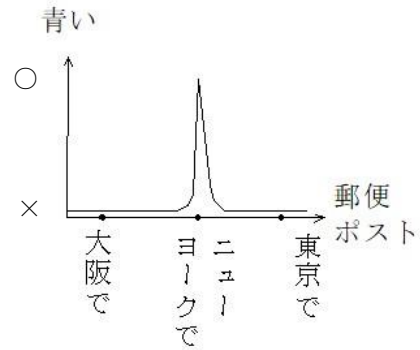


図 1

「{サメ, クジラ, マグロ}の中で哺乳類を選びなさい。」という質問に対して解答者が「サメ×, クジラ○, マグロ×」という気持ちを表すために

クジラ が 哺乳類だ (7)

と言ったとする。この場合の「が」は総記の「が」と呼ばれ[1,2,3,4,5]、単に

クジラ \in {哺乳類の集合} (8)

という意味を持つだけでなく、

問題文のクジラ以外 \notin {哺乳類の集合} (9)

であることも示す。

【総記の「が」】

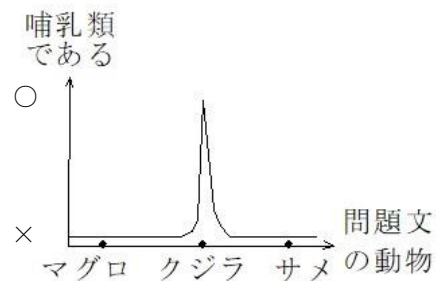


図 2

2 「〇〇は△△が□□」という文

人間またはコンピューターが表1のような長いというイメージに関する2次元の配列形式のデータを持っていたとする。

表1 発話者の持つデータ

長い	手	首	足	鼻	舌
キリン	0	10	7	0	1
象	0	0	2	10	0
テングザル	10	0	0	6	0
カ	0	0	10	0	0
アリクイ	0	0	0	4	7
カメレオン	0	0	0	0	10

さて、カメレオンが餌の虫を食べるのを初めて見た子供が舌の長さに驚いて

舌が長い (10)

と言ったとする。自分の持っている舌のイメージと比べて長いと言っているのでこの「が」は中立叙述の「が」である。そこで、中立叙述の「が」を用いた

(動物名)は(体の部分)が長い (11)

という発話は表1で該当する体の部分の示す縦の列における比較によって行われると考えられる。

例えば、表1の「足」が示す縦の列から判断し、発話者は中立叙述の「が」を用いて

タコは足が長い (12)

と言うことができる。そして、聞き手は発話者がタコの相対的な足の長さは一般的な動物より長いと考えていると判断する。一般的な動物の相対的な足の長さの強度を3とするならば、タコは4以上という情報を聞き手は発話者から得たことになる。

「象の体の部分で長いと言えるところはどこか」と訊かれて

象は鼻が長い (13)

と答えたとする。この「が」は総記の「が」である。

そこで、総記の「が」を用いた

(動物名)は(体の部分)が長い (14)

という発話は表1で該当する動物名の示す横の列における比較によって行われると考えられる。

例えば、表1の「アリクイ」が示す横の列から判断し、発話者は総記の「が」を用いて

アリクイは舌が長い (15)

と言うことができる。そして、聞き手は発話者が、アリクイの舌の相対的な長さは体の他の部分よりも大きいと考えている判断する。つまり、体の部分の中で舌が最大の強度を持つという情報を聞き手は発話者から得たことになる。

おわりに

ニュアンスの違い程度でしかないかも知れないが、「は」と「が」の働きの違い、中立叙述と総記の働きの違いを認識していることは、コンピューターに日本語を聞き取らせたり話させたりする上で重要であり、情報を収集・蓄積する上でも有効だと考えられる。

参考文献

- [1]久野暁：『日本文法研究』, pp.27-47, 大修館書店(1973)
- [2]庵功雄, 高梨信乃, 中西久実子, 山田敏弘：『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』, pp.259-268, スリーエーネットワーク(2000)
- [3]上林洋二：「IV.5.A 主題と主格(ハとガの表現)」, 『日本語百科大事典』, 大修館書店(1988)
- [4]井上和子, 寺村秀夫：『日本文法小事典』, pp.151-163, 大修館書店(1989)
- [5]久保美織：JAPANESE SYNTACTIC STRUCTURES AND THEIR CONSTRUCTIONAL MEANINGS, pp.10-41, ひつじ書房(199)